あしたばん

2011年
（平成23年）
7月25日
月曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
ashitaban@vanotica.net

第七号

まだ見ぬ三宅島を想う
「ロック～わんこの島～」

「明日の昼間、ヒマですよね？」

久しぶりに加藤先生に声を掛けていただいたと思ったら、ヒマ人扱いだった。先生の期待に違わず、（たまたま）翌日はヒマだったので、お誘いに乗ることにした。

そのお誘いは、映画「ロック～わんこの島～」の鑑賞会。参加メンバーは加藤先生、学生、OBなど計四人。話題の夏休み映画が公開されたこともあり、映画館は家族連れで賑わっていた。

私は、三宅島を訪れたこともなく、三宅島に関する知識もほとんどない。知っているのは三宅島で噴火があったこと。そして、自分が卒業した加藤文俊研究室が今年から三宅島でプロジェクトを始動したことぐらいだ。私と違い、加藤先生と加藤研所属の院生の上地は六月に三宅島に足を運び、さらに上地はこれから一ヶ月、三宅島に滞在する予定だ。三宅島の風景を知っている二人は、私と映画に対する期待値が違うように感じた。

「ロック～わんこの島～」は噴火をきっかけに、避難することを余儀なくされた家族とそのペットである犬のロックの物語だ。三宅島で火山の噴火が起きたこと、そして、そのために多くの島民が避難生活を余儀なくされていたことは、メディアなどを通して知っていた。しかし、それはあくまで出来事の一つとしてしかとらえていなかったものだ。だが、この作品を観たことによってその意識が少し変化した。

抗えない理由のために、故郷を去らなければならないということは、どれほど辛いことだろう。私には想像できないし、簡単に「共感した」などという言葉は用いたくない。突然に新しい土地での生活を強いられ、そしていつ叶うかもわからない帰郷を希望に日々を暮らしていく。もちろん、その日々には幸せを感じる出来事もあるだろう。映画の中では、その幸せの鍵を犬のロックが握っていた。自然と寄り添い、生きてきた島の人たちは強く、しなやかに違いない。自分たちがコントロールできないものに向き合い、それを慈しむことを知っているのだと思う。私もいつか、三宅島に足を運び、その力を感じたいと思った。

私が映画を観てこんな感想を持ったのは、きっと加藤先生や上地と一緒に鑑賞したからだ。島の風景を知っている二人と観たからこそ、三宅島や、そこで生活する人そのものに想いを馳せることができたのだろう。当事者意識は伝搬していくのだと感じた。

（仲尾　千枝）

上田義彦写真展「火山の島」へ
―なぜ、心動かされるのか―

七月十七日、私は銀座リコーフォトギャラリー／RING CUBEで開催中の、上田義彦写真展「火山の島」へ向かった。三宅島大学を通じて、島をより知っていきたいと思うことや、もともと上田義彦氏の写真の世界観がとても好きだったこともあり、告知を見たときから必ず行きたいと思っていたのだ。上田氏の作品はそこにある人やモノの空気を写真にしているようで、まるで絵画のような美しさがある。そして物語を感じる。この取り合わせを知ったとたん、自分の見てきた三宅島の海や人、風景がフラッシュバックして、想像していただけで涙が出そうだった。

ギャラリーにたどり着くと、まず挨拶文が目に飛び込んだ。そこにあったのは、三宅島の海や人、風景と向き合って写真に残してきた上田氏の言葉だった。何度も噴火を経験し、危険もあるなかで「島に戻る」ことを選んだ島民の方々の思い。わたしがそれを代弁することはできないが、「避難」によって身体は守られても、島民の方々にとっての「こころ」は、やはり三宅島にあるのではないかと展示を通じて感じた。写真にうつる方々の表情は豊かで、風景はなにかを語りかけてくる。やはり絵画のようで美しいのだが、強さをも感じる。予想していた以上に、思いがこみ上げた。

わたしはなぜ、心動かされたのだろう。考えてみれば、写真にうつっている強さや美しさを、実際に三宅島で感じたからだと思う。わたしがまだ知らない、魅力が島中にあるのだろう。そのひとつひとつを大切に、感じていきたい。

（大西　未希）

doughnuts企画
上田義彦写真展「火山の島」
【期間】七月十三日（水）～三十一日（日）
火曜日休館／入場無料

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

三宅島への意気込み

この二人が伺います！

八月、加藤文俊研究室から二名が三宅島へ向かう予定をたてている。渡航にあたる意気込みを綴った。

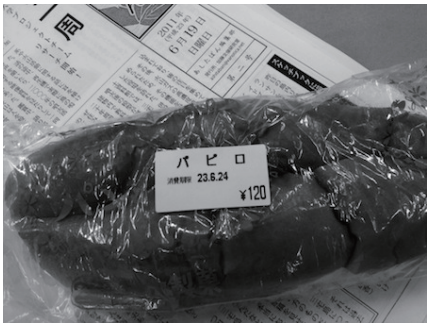
わたしの夏休み

初の三宅島上陸から、早いもので一ヶ月が過ぎた。そして今週末、私は再び三宅島行きの船に乗る。築穴製菓さんで約一ヶ月間、アルバイトをさせていただくことになったのだ。

きっかけは、『パピロ』というパンを取材した際に（『あしたばん』第五号の記事参照）、築穴さんが「八月にアルバイトの募集をしているんだよね。」と言ったことだった。その話を聞いた二日後には、私はアルバイトのお願いの電話をしていた。「三宅島にまた行きたい！」という強い想いと、島のパン屋で働ける機会があることに運命的なものも感じたのだ。私の出身は沖縄県宮古島で、両親はパン屋を営んでいる。「島」と「パン屋」という共通点に、不思議な巡り合わせを感じずにはいられない。

三宅島に一ヶ月間滞在する。前回とは違って長期での滞在、また二年に一度の祭の開催など、島の人々や文化に触れられる機会は多い。まずは、前回のリサーチでお世話になった方々に会いに行こう。そして、これからお世話になる築穴製菓さん、三宅島の皆さん、どうぞよろしくお願いします。

（上地　里佳）



太鼓の音に、思いを馳せ…

はじめての三宅島訪問は、初夏の香りのする六月末。いま、二度目の渡航の予定を立てながら、胸を躍らせている。前回の訪問で、太鼓の練習風景を見学させていただいた。そこでお話を伺ったのが、三宅島のお祭り「富賀神社大祭」の存在だった。

「八月のお祭りに合わせて、ぜひ行きたい！」と決めた私は、さっそく準備をはじめ、八月二日～五日に訪問予定だ。この『あしたばん』七号を届けながら、三宅の方々に新たにお会いできることを願っている。ぜひお祭りの楽しみ方をご指南いただきたいので、あたたかく受け入れてくだされば幸いだ。

今回の訪問にあたり「助手志願」の申し入れを受け、共に三宅島へ行く事になった。慶應義塾大学総合政策学部一年生、岩橋史弥君だ。愛称をこめて「ワトソン君」と呼ぶ事にしたい。新しい仲間と一緒に、どんな三宅の一面が見られるだろう。少し、季節も変わっているだろうか。三宅島の海と太鼓の音を思い出しながら、今日も夜が更ける。

（大西　未希）

目指せ！最優秀作品賞！

公益財団法人東京都島しょ振興公社が、伊豆諸島・小笠諸島の魅力をより多くの人々に知ってもらうための観光ポスターを募集する「第四回 伊豆諸島・小笠原諸島ポスターデザインコンテスト」を実施している。

なんと優秀作品には賞があり、最優秀作品賞には、賞金三十万円と副賞として東京諸島への旅行券十万円相当、記念品が贈られる。入賞作品は、「入賞展」に出品されるだけではなく、今後のPRツールとして活用される予定だそうだ。

三宅島に対して思い入れを持ち始め、深く関わっていく予感がしている私たち。このコンテストに出品して、賞の旅行券で三宅島を訪れ、私たちが制作したポスターをどこかで目にすることを想い描いてしまう。

昨年度は、全国から九十九点にものぼる応募があったとのこと。競争はなかなか激しそうだ。

（飯田　達彦）

ごちそうさまでした

お腹が空いて集中力も切れかかってきた頃、しょうゆの香ばしいにおいが漂ってきた。心待ちにしていたあしたばご飯のできあがりを知らせる合図である。この日は研究会活動の後にあしたばんの編集会議が予定されており、その腹ごしらえとして、あしたばご飯を食べることに決めていた。特別な仕込みは必要ない。米と三宅島で購入した「あしたばご飯の素」を炊飯器にセットし、後は待つだけ。こんなにも簡単にあしたばの炊き込みご飯を味わうことができるとは思ってもみなかった。

炊きあがったご飯はほんのり茶色く色づき、かき回してみると、底の方には少しお焦げができていた。あしたばは濃い目に味付けされていたが、ご飯と一緒に食べるとちょうど良い味わいで、ほのかな苦みにどこか懐かしさを覚えた。それと同時に島で味わった数々の食材のうまみを忘れないうちにまた島へ行きたい、もっと島の味に触れたいという思いが頭の中をめぐり、お腹も心も十分に満たされていったのだった。

（森部　綾子）

三宅島大学
9月中旬開校に向けて、着々と準備中！

M

Comming soon !!

※このロゴは仮のものです。

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。